

## 潜在的な感情の評定は自己呈示動機によって歪みうるか？

稲垣(藤井) 勉<sup>1,2</sup> 澤海 崇文<sup>1,3</sup> 相川 充<sup>1,4</sup> 中野 友香子<sup>5</sup>

<sup>1</sup>教育テスト研究センター<sup>2</sup>鹿児島大学<sup>3</sup>流通経済大学

<sup>4</sup>筑波大学<sup>5</sup>科学警察研究所

本研究は、Implicit Positive and Negative Affect Test (IPANAT) によって測定される潜在的感情が、自己呈示動機によって歪みうるか否かを検討した。90名の男女を(1)自身の良い印象を与えるよう教示する群、(2)自身の悪い印象を与えるよう教示する群、(3)与える印象について教示しない統制群にランダムに割り付け、潜在的感情を測定した。分析の結果、IPANAT得点は群間の有意差はなく、潜在的感情は自己呈示動機の影響を受けにくいことが示された。

キーワード：潜在的感情，IPANAT，自己呈示動機

### 1. 問題と目的

近年、自動的・無意識的な特性や態度などの心的傾性を扱う研究が増加している。これらは意識的な自己報告で捉えにくく、測定にはImplicit Association Test (Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998; 以下 IAT) などが使用されてきた。こうした流れの中で、Quirin, Kazén, & Kuhl (2009) は、潜在的な感情を測定する Implicit Positive and Negative Affect Test (以下 IPANAT) を開発した。IPANAT は、「SUKOV」といった無意味語に「幸せな」「憂うつな」などの感情を感じる程度を問い、その評定値を潜在的感情として扱う。例えば、無意味語に対し「元気な」「楽しい」といった評価が高ければ、回答者のポジティブな感情が高く、「無力な」「緊張した」といった評価が高ければ、ネガティブな感情が高いと考える。

Quirin et al. (2009) は、IPANAT はポジティブ (IPANAT PA)・ネガティブ (IPANAT NA) の2下位尺度からなり、各下位尺度が十分な内的一貫性と再検査信頼性を有することを示している。また IPANAT PA・NA と複数の尺度との関連を検討し、IPANAT PA は顕在的な (i.e., 意識的なアクセスが可能な) ポジティブ感情や外向性と正相関を、IPANAT NA は顕在的なネガティブ感情や情緒不安定性 (神経症傾向) と正の相関を示すことを確認し、基準関連妥当性も示している。IPANAT の日本語版は下田・大久保・小林・佐藤・北村 (2014) が作成し、Quirin et al. (2009) と一致する結果を得ている。

IPANAT は「自己報告型の感情尺度で問題となるような回答の意識的歪曲の影響を受けない」とされる (下田他, 2014)。IAT のような反応時間を用いる手法は「可能な限り早く、正確に反応するよう」教示するため、連合の弱い概念間の分類課題の回答を歪めようとした際、反応を通常より早めるのは困難である (e.g., Kim, 2003)。ただし IPANAT は質問紙形式であり時間制限を設けないため、「社会的に望ましく回答するよう」教示した場合、回答の歪曲が生じるかもしれない。IPANAT は「人工語の印象評定」と教示しており、望ましい自己を呈示する動機の影響を受けないと予想することもできるが、下田他 (2014) も、自己報告尺度を用いた測定に歪みが生じやすい場面での検討の必要性を課題に挙げており、IPANAT が社会的望ましさの影響で歪むか否かについての検討は有益と考えられる。

そこで本研究では、参加者の自己呈示動機を操作し、IPANAT で測定される潜在的感情が影響を受けるか否かを検討する。自己呈示動機の操作のための教示は、本研究で対象とする18歳以上の者であれば多くの者が経験する、または経験している場面であると予想され、一定の現実味を持つと考えられる就職活動場面を採用する。また、自己呈示は必ずしも望ましい自己像だけでなく、望ましくない自己像を呈示することも想定される。就職活

動場面であれば、何らかの理由（その会社の望ましくない情報を聞いた、既に別の会社で内定を得たなど）により、面接において敢えて不採用となるよう振る舞うこともあるかもしれない。こうした点から、本研究では自己呈示動機の操作として、就職活動場面に関わる教示を行い、自己を望ましく呈示するよう教示する群（fake-good 群；以下 FG 群）、悪く呈示するよう教示する群（fake-bad 群；以下 FB 群）と、特に教示を設けない統制群（neutral 群；以下 N 群）の3群を設け、自己呈示動機が潜在的な感情に影響するか否かを検討する。

なお、実験にあたり、IPANAT の実施は下田他（2014）の研究3の方法を踏襲する。彼らは、IPANAT における人工語を評定する際にポジティブ・ネガティブ・ニュートラルの感情価を持つ3つの画像のいずれかを参加者間要因計画で呈示し、IPANAT PA および IPANAT NA の評定が画像の感情価に沿った影響を受けることを示した。本研究もこの方法を踏襲しつつ、自己呈示動機の影響を検討する。

## 2. 方法

**2.1 参加者** 18歳—52歳の男女90名（男性31名、女性59名。平均年齢26.29歳、 $SD = 5.71$ ）が実験に参加した。

**2.2 材料** (a) 日本語版 IPANAT (下田他, 2014)：一つの無意味綴りに対し「元気な」「楽しい」「幸せな」「憂うつな」「無力な」「緊張した」という六つの形容詞を呈示し、「1: 全くあてはまらない—4: とてもあてはまる」のどれが最もよくあてはまるかを4件法で回答を求めた。(b) 社会的望ましき反応尺度 (谷, 2008)：社会的望ましき反応を、本来の自己像と信じて無意識的に回答を歪曲する「自己欺瞞」と、故意に回答を良い方向あるいは悪い方向へと歪曲し、真の自己像を偽って報告する「印象操作」の2因子と仮定して測定する尺度である。各下位尺度は12項目、計24項目である。回答は「1: 全くあてはまらない—6: 非常にあてはまる」の6件法で求めた。(c) 誠実性尺度: Big Five 短縮版 (並川他, 2012) から、本研究における教示の操作チェックのために誠実性を測定する5項目を使用した。回答は「1: 全くあてはまらない—7: 非常にあてはまる」の7件法で求めた。なお、本研究では他の尺度も使用したが、本研究の検討課題とは関連しないため報告しない。

**2.3 手続き** 実験は Inquisit Web License (ver.3.0) を使用し、Web 上で実施した。参加希望者にメールを用いて実験の説明と実験用 URL を送付した際、実験への参加は任意であり、不参加による不利益はないこと、いつでも実験を終了できることを併記した。参加に同意した参加者は URL にアクセスし、一連の実験プログラムを遂行した。参加者は社会的望ましき反応尺度に回答した後、次の課題を行う前に「就職活動中をイメージして、内定がとれるよう意識して取り組むこと (FG 群)」、「正解はないので、思ったとおりに回答すること (N 群)」、「就職活動で試験を受ける会社がブラック企業であることを知ってしまったため、試験で落とされるよう意識して取り組むこと (FB 群)」のいずれかが教示された。続いて、誠実性尺度を実施した後、IPANAT を実施した。下田他 (2014) の研究3と同様、人工語を呈示する直前に、特定の感情価 (ポジティブ・ネガティブ・ニュートラルのいずれか) を持つ画像 (1つの人工語につき1枚、計6枚) をそれぞれ3秒間呈示した。実験終了後、謝礼として図書カード500円分を送付した。本実験の所要時間は15分程度であった。

## 3. 結果

IPANAT の説明を読み飛ばしたと報告した1名の回答は分析から除いた。

**3.1 IPANAT の因子分析** 下田他 (2014) と同様に、感情語の評定値に対し主因子法・Varimax 回転による因子分析を行い、下田他 (2014) と同様の2因子構造を確認した。

**3.2 各尺度の得点化** 各尺度について顕在的測度は逆転項目を処理した上で、得点が高いほど当該尺度名の傾向が強くなるよう合算平均得点を求めた。IPANAT は下田他 (2014)

にならない、各無意味綴りに対する6種類の感情語の個人内平均値を求めた上で、感情価別に個人内平均値を算出し、ポジティブ語3種類の平均値をIPANAT PA得点、ネガティブ語3種類の平均値をIPANAT NA得点とした。

**3.3 操作チェック** 自己呈示に関する教示後に測定した誠実性尺度の得点を従属変数、教示の種類を独立変数とした分散分析の結果、教示の種類の主効果がみられた ( $F(2, 87) = 58.14, p < .01, \eta^2 = .57$ )。多重比較の結果、誠実性得点はFG群 ( $M = 4.88, SD = 0.76$ ), N群 ( $M = 3.81, SD = 0.98$ ), FB群 ( $M = 2.23, SD = 1.10$ ) であり、実験操作は成功したと判断した。

**3.4 潜在的感情への教示と画像の効果** IPANAT PA・NAの得点を従属変数、教示の種類 (FG, N, FB) および呈示画像の種類 (ポジティブ・ネガティブ・ニュートラル) を独立変数とし、社会的望ましさ反応尺度の2下位尺度の得点を共変量とした共分散分析を実施した。その結果、IPANAT PAに対し呈示画像の主効果が有意傾向であった ( $F(2, 78) = 2.38, p = .099, \eta_p^2 = .06$ ) ため、多重比較を行ったが、各呈示画像間の差はいずれも有意には至らなかった ( $ps > .13$ )。また、教示の主効果および呈示画像と教示の交互作用はいずれも有意ではなかった ( $Fs < 0.72, ps > .47, \eta_p^2s < .02$ )。IPANAT NAに対しては、共変量である自己欺瞞の主効果が有意傾向 ( $F(1, 78) = 3.19, p = .08, \eta_p^2 = .04$ ) であり、同じく共変量とした印象操作の主効果が有意 ( $F(1, 78) = 5.79, p = .02, \eta_p^2 = .07$ ) であった。また、呈示画像の主効果が有意であり ( $F(2, 78) = 5.27, p = .01, \eta_p^2 = .12$ )、多重比較の結果、IPANAT NAの得点はネガティブ画像 ( $M = 2.00, SD = 0.41$ ) とニュートラル画像 ( $M = 1.59, SD = 0.43$ ) との間のみ差が有意であった ( $SE = .11, p < .01$ )。教示の主効果および呈示画像と教示の交互作用はいずれも有意ではなかった ( $Fs < 0.90, ps > .47, \eta_p^2s < .04$ )。

#### 4. 考察

自己呈示動機を操作した状態で測定した潜在的感情の平均値に対して、IPANAT PA・NAには教示の主効果は検出されなかった。したがって、潜在的感情に対して、自己呈示動機による影響は観察されなかったと考えることができる。

ただし、本研究における課題として、自己呈示動機の操作の教示が与える感情への影響が小さかった可能性が考えられる。就職活動において「望ましい自己を呈示するためには、ポジティブな感情を報告することが望ましい」と予想して今回の教示を用いたが、例えばFB群に「悲しい気分で落ち込んでいるよう振る舞うこと」といった教示を行うことで、IPANATの得点への影響について、より直接的に検討できると思われる。

#### 5. 参考文献

- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: the Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74: 1464–1480
- Kim, D. Y. (2003). Voluntary controllability of the Implicit Association Test (IAT). *Social Psychology Quarterly*, 66: 83–96
- 並川 努・谷 伊織・脇田貴文・熊谷龍一・中根 愛・野口裕之 (2012). Big Five 尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討 心理学研究, 83: 91–99
- Quirin, M., Kazén, M., & Kuhl, J. (2009). When nonsense sounds happy or helpless: The Implicit Positive and Negative Affect Test (IPANAT). *Journal of Personality and Social Psychology*, 97: 500–516
- 下田俊介・大久保暢俊・小林麻衣・佐藤重隆・北村英哉 (2014). 日本語版 IPANAT 作成の試み 心理学研究, 85: 294–303
- 谷 伊織 (2008). バランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版 (BIDR-J) の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 17: 18–28